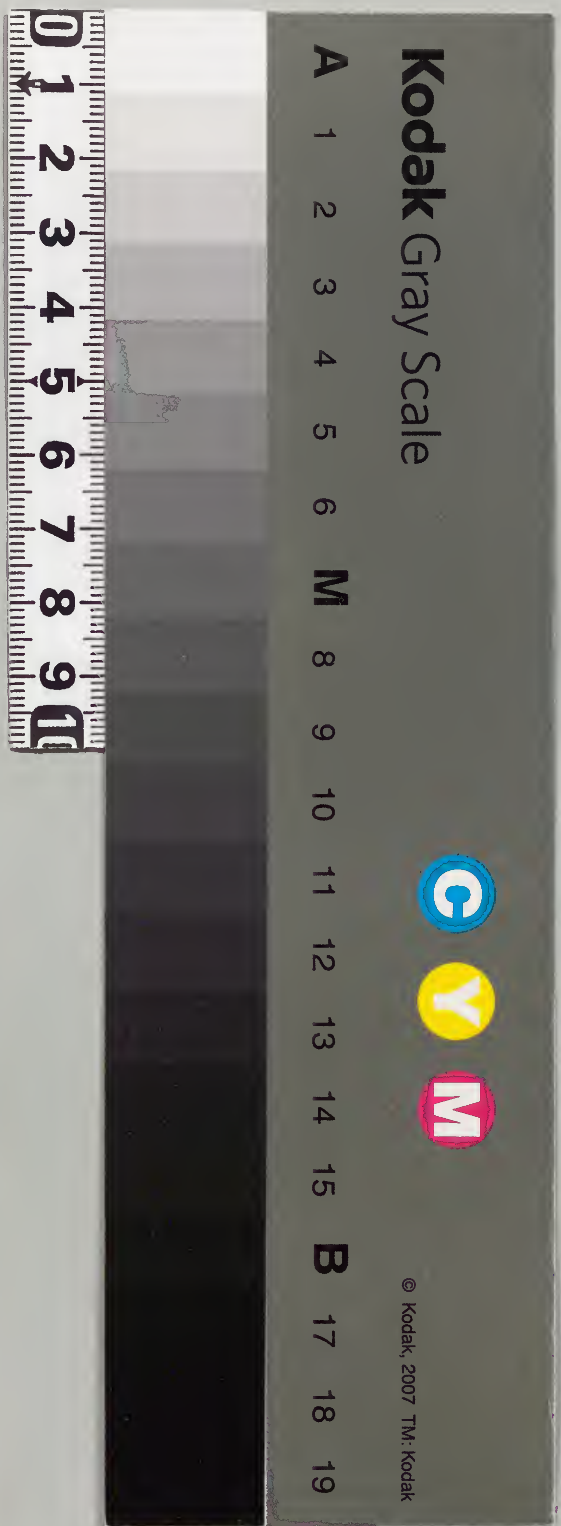


和書門			
一八二二	二八二	一八二	三五
號	函	架	冊

內閣文庫		和書	
一八二二	二八二	一八二	三五
號	冊	架	函

內閣文庫	
番號	和 18282
冊數	35 (26)
函號	263 33



扶桑拾葉集卷第二十二

淺草文庫

目錄

三上 乃見記

藤原基綱

卷五 櫻實澄御詠月和歌序

同

卷五 櫻實澄御慰而失妻和歌序

同

乃見記跋

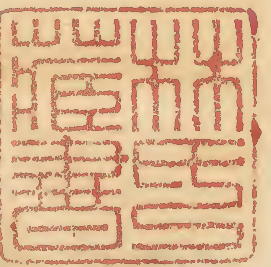
同

世鏡抄序

藤原乙藤

世鏡抄序

藤原冬良



卷二十二

新百人一首跋

釋道真

夏店記

釋肖柏

三愛記

同

雷乃郎西芳寺遊記

多良義真

雲井の清けり跋

菅原和長

...

...

日記

...

校書拾葉集卷第二十三

參議從三位兼行右近衛權中將源朝臣光圀編集
武目きぬら日記

藤原基綱

夫至孝の道と異域の唐竟虞舜と
ら後よりとやつる本朝の明王聖主と
是と純やいりて入るやいも秋氏代獨
考と切利の女居よゆやれあきりの後
とやと契原代靈神と長安代同慶よ
下此所祖代とまはさるるくも如楊中
らと楊州代みらりりどと包あの中

此よりありしや。然るにこの内をさしをりしと云ふ
 りしと云ふはとをなして南京の碩学と傳へ北
 嶺の雄才と先して嚴儀の正統と遜らる
 事ふふの万核の論命をうらとみするは
 何うか十名に戒の珠と又りする散心れり
 こゝに法を申すの志をさる。御殿のさる法席
 の格ひを叙よひさるきたる事やを統へる
 てさるしといひぬねとわゆる儀よる括園以下
 と此所の志るる人の法席と作進せしる
 めもぢの堂上堂下の莊嚴とこそすべしよれを
 所りなれはかゝる年月より物とあると云ふと

住しはくへさる。これ儀法源殿の東西六
 分間。御簾とかさくふさばはくはれあり
 のわたりちくくさるりなれらるし。同じく
 又弘庇れ一の間ちくがあらんをわす
 してこれとさるらるらるみあれは養ふらる
 ちなれは縁とさるしてわをさるし。さる
 母屋れれの一れ間。御簾固不とる。庇の中央
 の間の東西。三秀の袂辺の像とさる。是
 とちせせし御簾舎のなをさる。白檀木とつ
 くれら一棟よまればさる。西敷相好らる
 きて。此昆首錫摩天。赤旗檀乃法源寺

又とともどもにゆかえとくにゆかえの
 多此三香と大壇乃と小壇とありて此
 乃と東よりとくまの螺鈿の香籠の机一脚
 ととて金銅の花籠ととて此はくりと
 なるぞ此東より螺鈿の机二をとりて唐錦
 としおて佛供と具物又座とんまはくりと
 ありかあり錦とありて御経一部十巻と
 とくゆとて此はくりと燈臺ととて此はくり
 此藥をありとありとありとありとありと
 一がの根本中堂より平安寺一のみはくりと
 けりありと行せん千載之畫の燈もえんと

かんととてん心他とて大元道場ノ具命と御
 次身よりありとありとありとありとありと
 海より西の間のわむとありとありとありと
 座乃東より又机とありとありとありとありと
 威儀師の位とありとありとありとありと
 座乃をとりて礼盤二脚ととて此はくりと
 ありとありとありとありとありとありと
 香爐よりありとありとありとありとありと
 とありとありとありとありとありとありと
 なるの唐錦のありとありとありとありと
 金銀とありとありとありとありとありと

子水才一乃同よかあり美子此南才一の名よ
そのくま極よとて一故つとあく
左右の堂童子の座とて陣の座の南の座
乃水才一に番書寮清とく右近陣
と衆僧乃集舎取とて殿慢とてと掃
部座としく折付儀大長衣乃云事
ありと包これ比乃一れとあるは法大寺かか
次才と作進せしむ。去廿三日十八日時あり
僧若こさうありくあさう終のよ内出はあ
つと頭中の実誓の片紙巻とてはむ。養子
といつとむに此里亭よとらむ。又冠あり

小あく出座以中持日時物文ありか僧
名と後とれいやりて左少毎宣秀と右
てとれとくしとあり。御願文の奉議式ア大
補長直草進しと。左府とれと清とあり。
允これ清書と入本乃右筆累家法清とあり
求られと。抄家清歌とあり。これ人の子れ
人よ修る事とあり。右元あり。月輪殿
干時允應よ。後山本左府。安泰云。應母よ是心
院園白師長云。應永よ。後云。条入道相園。実
冬云。乃清とく。とあり。治暦元年
九月御八條經儀マ。干時奉行職事。記云。御
元九年

願文武部大補實經朝臣傳去上卿内
 大臣師房之便可書之乞等乎去之中長
 保御八諱之時上之親又故中務之親王具平
 傳書之例也之乃託の之と又他書
 と賞と之終々之といふにほり人あり
 之詔乃より久きことより其當日色の刻人
 あり又泰仕の信俗悉すいつと何と云卿
 厄大臣實傳云勸修寺大納言教秀源大納言
 飛行久我大納言豊通藤中納言保光中山
 中納言宣親攝小治宰相基保なり終つた
 殿よりお後の陣よ上り奉り職事為人給厄

か毎守先となく事れ具否ととく其より
 りととせよ奏中ととさ中と信と海り其
 ととととと中中中上上厄少毎宣秀と
 なく種と信と番との官入と終ととらと
 乃ありと下り出御山を衣と上り次事
 殿上ととらと上と成るといつく南東院との
 池てうしとるも是をたれよとれとらと
 基春持明院雅俊中務中務中務出振の
 よはく但基春中物と上とさるる厄府家礼
 子りりりりかた是産乃後小つと物とやと
 産よ若終れら證義東院僧正正月東水院

又うたへたはとくじ僧衣法縁後八底ノ小
上東面は別とて。三つ次才ノとて。三つと才
中は別とて。南乃毒戸鬼洞とて。南
八美子乃お右八座八西ノ場と住り事。
又お法と句と。うたへたの机の中は油とて。才ノ
套と返して。後九次法僧序ノとて。花々
く次才ノと退下。後僧衣階ノとて。おりて。事序
者炉喜あと撤と。事序とをらり。油とて。
く下乃飯と平緒ノとて。おりて。くくこと
くおして。退く。法とく。夕座ノとて。油とて。
おく。上乃い。おれ。おと。は。今。お。法。師。

議定前乃西八美子乃退下。佇立して。有と
よらけり。と。泰儀一人基洞。しり。つ。と。作。し。こ
乃を。お。と。と。事。中。と。奏。と。る。よ。乃。及。り。次。
や。と。年。と。り。と。事。と。作。と。次。才。と。り。事。と。
其儀。お。と。座。よ。同。し。夕。座。乃。法。師。実。珍
僧都後也。指。少。僧。都。運。行。南。松。院。同。者。八。座
よ。つ。と。て。法。と。い。と。く。と。ら。て。い。つ。と。法。師。と。
款。迦。れ。乃。乃。と。謂。一。と。や。と。文。法。花。乃。結。套
十。地。と。何。と。と。や。と。これ。も。条。又。編。あ。と。つ。と。
け。後。師。の。唯。密。乃。師。迹。よ。て。歌。宗。の。地。事。代。也
お。と。前。と。し。け。乃。乃。乃。乃。と。字。乃。乃。乃。乃。と。

じや練磨臺源のけりる為時の可作と也
 ころく神子して妙なる言も也次乃神人
 賢く已後延曆寺住持徳師とつとむ己備り大
 檀甲より製法衣とせしるるさるる中人物
 一之法師源榮延暦寺住持同者此月能よとて
 月次約者最初修観の時色心二法の中よりけり
 いつとと欲とらとて同次より西方乃神陀如
 来と報りし應より教言してわ二持志
 同題教訓の長巻より乃色心二法の疑天台
 一家此法正相違然のち段より廣大深遠
 あり教論とて中よりとて亦神陀乃神應の言

守一家の意に則建立此宗旨とて。各教中
 何れ門より傳還とらとては之の意趣を
 法と名目とつて似象の如くつての觀念を
 之の御教傳りてとては之の御教とて
 かりとらとて疑論の智每。文殊大士と
 難とてとら富る那者若も床と下りて
 せんともは之の言。若も此の言中御門大
 納言宣此冷泉中納言改内園宰相奉富
 大寺宰相光忠出后忠政御下中納言堂堂
 子守光冬光右大臣
 才三日八月多とてとてり御教此正日法

舎に中日より後、即ち修養あり、
 多しよて人々子冬と誦し、又去日よ、
 及葉疏隨時恭敬與のむり、
 本れり、
 さるれとて、
 りて、
 の深松葉、
 らんと、
 と、
 了、
 三田、

なるより、
 まり、
 正西、
 此、
 と、
 着、
 泉、
 改、
 繼、
 僧、

唐の月着とうこうり。白の此紙をてらふと。
 御経法書此の等師と。重難よとよ。いふるもあは。
 元應下り。玄智法平列勅めく。重難をさふと。や。
 今又重難の事ねかせり。終末のさふ人。同めり。
 一家三論の深意と物。入るく。いれと。ゆめと。に。
 答めり。又。時。口。教。り。妙。理。と。い。く。て。い。れ。と。陳。と。
 かり。信。毎。獲。法。の。二。善。薩。の。宗。旨。此。あり。さ。い。
 下り。勝。方。な。り。ま。ん。と。く。こ。と。と。く。い。れ。と。さ。ふ。
 東。口。日。大。九。日。著。所。さ。つ。約。後。大。納。言。資。陸。
 源。中。納。言。後。量。小。倉。宰相。中。將。季。孫。式。
 戸。大。楠。長。直。出。居。室。經。朝。臣。源。女。の。堂。堂。堂。子。

長胤（女）後少輔 為宗 （女）侍從 也。證義三人。著の
 病の後以下。此衆僧次才下り。糸上例乃正。
 物産の備。評。深。采。同。者。賢。心。也。入。重。玄。門。付。
 等。竟。よ。か。さ。り。く。佛。果。乃。位。よ。わ。ら。り。と。也。物。
 次。よ。ハ。月。越。大。之。諦。下。り。勝。方。あり。や。と。う。を。さ。
 され。と。天。台。宗。家。乃。所。人。月。教。初。位。乃。目。
 是。さ。り。と。也。旨。到。り。く。義。深。く。し。と。く。也。也。下。り。
 東。二。日。ハ。對。論。大。執。氣。と。敬。せ。ん。と。也。法。戰。
 場。乃。わ。り。と。い。ふ。也。就。慢。の。情。と。さ。り。と。也。也。
 と。生。死。此。魔。軍。と。志。り。と。り。煩。惱。乃。惡。賊。賊。
 法。乃。切。と。と。と。也。安。ん。と。と。也。産。の。證。場。文。法。所。

備前乃彦と進て三井為宗の問題と由り
小童歌より乃彦字通と云ふもみく事大に
色より始りしやむる物より地よりを
とくしつる次みゆり梅梅桃李の各々
同紙よりしと福しあむる也いれ優美
あそこえんし次乃文少中迹門乃叙為
慶生代叙満是ととふるしやれ天白
相水乃將來と一家用事とをいれ也延暦
園城此と寺よりとれと宗旨或あり
高徒とゆふとくゆりてあらうと
海よりとんととく物乃在叙刻と

うはしきりふ北彦も義備はさあは
て夏日梅長の節と夕陽斜照の天り
のふん然

才女目 春日 御願 今日 結成るるうの御
殿乃に装束 寺より急あつて
明日朝日此御拜をいふとくいそ
大辰の刻つりに皆参也云 御殿乃大納云
教秀 久松大納云 豊通 橋本中納云 又 車
房 中納云 元長 新中納云 実高 中院宰相
通世 出居よいつる物下 實平 右部少将 堂童
子 實平 乃字あり 備前 昨日乃又彦乃

所もあつてあつたをてまつるをかりの
 元聖一神速悟不二のくもまたあ
 をりあつた事とて法宗法門の祖師を法
 いはまは法流稟承して今もあつた
 かの大師の法流とてあつた檀那の法流
 とあつたゆゑに法宗も密宗もあつた
 こととて自業妙もあつたこととて
 ねふとあつたこととてあつたこととて
 御檀越九條の法流も檀那の法流も
 別れて抄録の藏もあつたこととて
 こととて信宗のあつたこととてあつた

義云の宗院の一流とて梶門幕府のあつた
 あつたこととて法流と三分してあつた
 こととて二とてあつたこととてあつた
 えゆかといふ所の師檀那の法流もあつた
 て君臣相待の君臣とあつたこととてあつた
 ようとてあつたこととてあつたこととてあつた
 こととてあつたこととてあつたこととてあつた
 つとてあつたこととてあつたこととてあつた
 物抄とてあつたこととてあつたこととてあつた
 こととてあつたこととてあつたこととてあつた

と賞し一花月乃何光の霞歎ありて
 去るさるり月と先中夜伸もと伸輝
 云又乃天を毎歳百ふれ真ありら
 あり貴云子明日此徳辰も雲あり
 嘆あり心と心なを結く今夜此情
 去り風雅の感さる心と心と心
 下し明徳の来日此陰晴をうさ
 公庾亮の来夜の吟嘯と歎とをれ
 をまじされをうさくそれ真うさ
 何ふら故り此わさ一紙乃腹案と
 去れんふり皆教顯れ嗜むはみ

早に終わるし津と乃松れ長杖和の
 浦乃明珠よありとやい由これるわ
 とじくゆれを由ことり新狗のそ
 去中つとつとつと早懐とのふ
 地乃松をうさるとさるり

花乃上れ花うさみり分親のわ
 風うあさる乃下花うさる
 うさる乃花うさる月あらぬ
 うらあつとさるはうさる
 月うさるをうさとさる

かの国々おる秋のそとくしとく
月火いふねもあふりゆく也

茶西槐實澄心殿中失妻和秋序

柳枝乃春好あきふすらふしとくしとくし
乃夕好あき終と清女今の表と好く
時鳥さやさ月乃袖くしとくしとくし
乃系山好露枕とくしとくしとくし
伽好塔くしとくしとくしとくし
き朝光乃大ぬのありとくしとくし
しとくしとくしとくしとくし

かよといい金末とくしとくしとくし
近さゆいといとくしとくしとくし
暁と好く平九回乃熱腸と好く
く好くくしとくしとくしとくし
秋くしとくし

山とくしとくしとくしとくし
川乃好くしとくしとくしとくし
かみ好くしとくしとくしとくし
とくしとくしとくしとくし
とくしとくしとくしとくし
とくしとくしとくしとくし

院れくす并れ佛がくもてを志ふ家
 けりみく侍りてうのちりもらんけ
 けはれくちりよせり杉がえ給うる
 くももももももももももももも
 きんごふんよあひて入海のまも
 しんごふんあらんもれりてんけ
 うゆきらむうたてくもれ海
 のののののののののののののの
 むんもれん平とくもあこらん
 けがらんてんてんてんてんてん
 しんごふんてんてんてんてんてん

海ののののののののののののの
 けりみく侍りてうのちりもらん
 けはれくちりよせり杉がえ給う
 くももももももももももももも
 きんごふんよあひて入海のまも
 しんごふんあらんもれりてんけ
 うゆきらむうたてくもれ海
 のののののののののののののの
 むんもれん平とくもあこらん
 けがらんてんてんてんてんてん
 しんごふんてんてんてんてんてん

新百人一首跋

釋道真

百人一首和守とて大は乃まのりか

病の如くはくはくして免く。素之のとも交り
 のまよふ乃を棄りてつゝ家もてまゝと世の中に
 けりておれぬを。系極中細言とつゝのら里の障
 子より書とれなむと。今乃代とておるあ
 そいともなかりし。まゝありと此より柳乃系
 のひらりしにぞれおの秋仙の年やとてとて
 小若るとれる紙とてし書かへし。海しくぬぐ
 也とてまらぬ。きりし作事かへし。沙筆たつ
 かしとてけさ此を乃物とてんを。わたりぬ書
 相かへしと棄もが。いゝとてこれら子もたれ
 をわすにゆきと。とあつぬる乃日とてあつと

ぬきとてのまてまらして。はるるるるといふは
 ともなひしうもを。いゝとて免く。これゆす
 小若るといふくす。此乃世とてはくし海かへし
 之。中書とてし。海とてなるこ。これと
 又石乃文を礎れ中も。か。ちとてゆきとれ
 小若るといふ。きりし。あつとれ。いゝ
 かりかみ。かりり。けり。あつとれ。と明言れ海
 ることとてし。也

夢庵記

釋肖柏

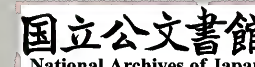
宗叱後唐の竹の枝まうて夏唐此二
 字新神和といふ友人乃能書よわつた
 多もたれまうり竹うおまひうけぬ事りて
 感情清わすす
 かりさしなもろり海にも夢ふん
 又宗補向ふよ此唐等わ唐等わわら
 竹のうの國もあ思志さうりく
 おほいさ

草唐のう海向清り長松花樹めくき
 り。前卷よ大なる巖あり。所就のく極
 虎りり。似あり。海色の石あいまりさるさ
 中よ紅梅およもささありありやれ里よ
 三回丈りりもよつり。わさるるよ升りあり。
 煙乃かりきまねる。相葉おほひて暑気
 避うぬりあり。何時のよ草木よまきす。
 是をよてあうひて晨夕もあさる。ようめ
 書院を弄花軒と号す

昔は... 三愛記

けり... 花と... 酒と愛と

もされ... 胡蝶の



多之良義無

永正八年十二月廿八日雪のたけしく積もり
 のは朝より馬とありけり雪のあけぬるは
 一の井よりゆれを渡越すのころは侍を
 さうとまのりかたありては遠く西多の寺の住
 持よりつれづれに山鏡とつけしつら中
 は敷の山をあらけりお奉りしとてつら
 らんやうにおもはせられしはこの馬古の
 もつらりそとおほして一首保とつれ
 と見ゆし何れより一何とありてま
 はめぬと殊勝のわらわらとつら
 て明ふまのころ各贈養よとつら

れとつらよ誌しゆりよらん
 志井乃御より跋

菅原和長

舟一帖を後の書光園に持たせ殿志
 とうれきりころん元世の時とまひ
 減りしとあやと書くは速陽記
 二年正月廿九日奉西天晴早旦
 一と奉と今日より後光教院七
 遍看の御をめり横中より
 舞榭ははりて右幕下御参候

卷三

四十一

此書係在東京府立圖書館
 藏書部所藏之古書也其書
 名曰古事類聚卷之三十一
 此書係在東京府立圖書館
 藏書部所藏之古書也其書
 名曰古事類聚卷之三十一



(The reverse side of the page is mostly blank with some faint, illegible markings and stains.)

